

第10回 虎ノ門フォーラム

主 催： 特定非営利活動法人ユーラシア21研究所
日 時： 平成20年1月23日(水) 18:00～19:30
場 所： 海洋船舶ビル10階ホール

プログラム

1. 開 会

2. 講 演

「ビルマ（ミャンマー）の民主化と日本の役割」

講師： 田辺 寿夫
ジャーナリスト

3. 質疑応答

4. 閉 会

配布資料

・ミンコウナインたちに期待する (レジュメ)

これからの虎ノ門フォーラムのご案内

2月 6日 (水) 18:00～ 「メドバージェフ政権下での日ロ関係の見通し」

講 師： 石川 一洋 (NHK 解説委員)

2月20日 (水) 18:00～ 「北朝鮮の脅威と韓日の対応戦略」

講 師： 高 永喆 (コリア国際研究所首席研究員、元韓国国防省情報本部北朝鮮担当官・日本担当官)

3月27日 (木) 18:00～ 「カザフスタン—草原と資源と豊かな歴史の国—」

講 師： 角崎 利夫 ((財)国際開発高等教育機構専務理事、元カザフスタン大使)

ミンコウナインたちに期待する

気になる男

2007年8月中旬から9月の終わりごろまでビルマの民衆は軍事政権に抗議する行動を繰り返した。きっかけは8月15日に石油、ガソリン、天然ガスなどがそれぞれ2倍から5倍に一気に引き上げられたことへの不満である。燃料費の突然の値上げに抗議する行動ではあったが、軍事政権へのつもり積もった不満がその背景にあった。ヤンゴンでは「88世代学生グループ」が街頭デモを始めた。リーダーたちは1988年の民主化闘争で活躍し、その後10年から15年におよぶ獄中生活を耐えた元学生活動家である。年齢はすでに40歳代半ばにさしかかっている。そのなかでミンコウナインはもっとも知名度の高いリーダーである。

8月19日、ミンコウナインはヤンゴン市内で行われた元NLD副議長ウー・チーマウンの三回忌に出席した。その帰り、「バス代もタクシー代も値上がりしてしまった。俺たちにはとても払えない。歩いて帰ろうぜ」と仲間を誘いスタスタと歩き出した。路上で加わる人も出てきた。これが値上げに抗議するいわゆる「歩きデモ」の嚆矢とされている。シュエバはインターネットの画面で、白いシャツ、ロンジー履きで笑みを見せながら歩道を歩くミンコウナインの姿を見た。あいかわらず絵になる男だなあと思いつつ。ミンコウナインが歩き出す以前にも燃料費値上げに抗議する行動はあっただろう。しかし、ミンコウナインという今やカリスマ性を持ち始めた名前の魅力が「歩き始めたのはあの男だ!」という新しい伝説を生み出した。

ミンコウナイン (Min Ko Naing) は1988年民主化闘争の学生リーダーである。その年3月以来の学生の反政府行動のなかで頭角をあらわし、8月には全ビルマ学生連盟 (ABFSU。ビルマ語略称バカタ) の委員長となった。アウンサンスーチーが政治の世界へ登場したのも、ミンコウナインをはじめとする学生たちの熱心な要請があったからだとされる。

ビルマ人は彼の名前を一度きくと忘れられない。3音節の名前のそれぞれの意味はMin (王) Ko (～に) Naing (勝つ) である。「王に勝つ」と名乗る青年が現れたのだ。彼は、より正確にはミンコウナインと称する男は、王のごとき独裁者ネウウィン (ビルマ社会主義計画党=BSPP 議長) をやっつけたいとねがっていた国民の期待を集め、一躍人気者になった。本名はポーウートゥン、1962年ヤンゴン生まれである。1962年はネウウィン (当時、大将。軍参謀総長) がクーデターを起こして政権を握り、1948年独立以来の議会制民主主義を終焉に追いやって軍人支配が本格的に始まった年である。その年はまた日本でシュエバがビルマ語を学び始めた年でもある。因縁を感じる。会ったこともないミンコウナインが妙に気になる理由のひとつである。

彼は1989年3月に逮捕された。88年民主化闘争に活躍した学生たちがなんとか軍事政権に一矢を報いようと地下活動をつづけていた時期である。陸路国境を越えてタイ国へ逃れた学生たち

もいた。彼はその前に国内で捕まった。「国の平穩を乱す活動」のゆえに 20 年の禁固刑（後に減刑）を宣告され、2004 年 11 月に解放されるまで 15 年を越える獄中生活がつづいた。シュエバには解放された直後のミンコウナインの声を聴いた記憶がある。たしか DVB（「ビルマ民主の声」放送）のインタビューだった。今後の活動について訊かれたとき、ミンコウナインは「今はゆっくりしたい。今後のことは落ち着いて考え、やるべきことをやるつもりです」といった意味の答えをしていた。慎重な人物だなとそのときは感じた。

次にミンコウナインの名がメディアに報じられたのは 2006 年 9 月、ほかの元学生指導者 4 人とともに再度拘束された時だった。当時、新憲法の骨格について討議する国民会議（アミョウダー・ニーラーカン。National Convention）が再開される時期であったから、混乱を避けた予防拘束ではないかといわれた。その拘束が波紋を巻き起こした。「88 世代学生グループ」を名乗る活動家たちが、ミンコウナインら拘束されて居る政治囚釈放を求めて嘆願署名運動を全国で展開し、厳しい軍事政権の監視の下、3 週間でおよそ 50 万人の署名を集めた。ミンコウナインら 5 人は、国連安保理でビルマ問題決議案が採択される（ロシア、中国の拒否権行使で否決された）直前の 2007 年 1 月 11 日に釈放された。拘束についても、釈放についても、そのタイミングを見れば軍事政権がこの活動家たちの動向と国際世論を気にしていることがわかる。

ふたたび民衆の前に

2007 年 5 月 27 日、17 年前のこの日 NLD が総選挙で圧倒的な勝利をおさめた。しかし、選挙結果は軍事政権によってまったく無視され、政権委譲はおろか国会が開かれたことすらない。その日、ミンコウナインの姿はヤンゴン市バハン区 NLD 本部前にあった。88 世代学生グループと NLD 党員たちがシュエダゴン・パゴダへ参拝し、政治囚の健康と早期の釈放を祈ることになっていた。人びとはパゴダへ向かった。途中、USDA を動員した当局側の妨害に遭い、進めなくなった。暴力沙汰が起これるような陰悪な雰囲気になった。その時、「引き返そうぜ。どこで祈ろうと気持ちは通じるさ」。そう声をかけたのはミンコウナインだった。NLD 本部へ戻ってきた 1000 人を越す群衆を前にミンコウナインが話をはじめた。弾圧を警戒してのことだろう、軍事政権を直接非難・弾劾するような表現は避けていた。直接聴衆に呼びかける話し方である。こんな調子だ。

「私たちが終始一貫、平和的な方法で、いかなる暴力も用いずにこれまでやってきたのは、みんな知ってのとおりだ。今日もみんなで規律を守り、正しいことを、自分たちがしたいことをする。ドー・アウンサンスーチーとすべての政治囚の解放を願い、ここシュエゴンダイン通りの、この大地の上から、大義にのっとりた勇気を示そうぜ。みんな同意してくれるか？」

・・・同意するぞ。同意するぞ。・・・

聴衆は盛り上がった。ミンコウナインと周りを固める 88 世代学生グループの面々、そして集まった人々の多くが白地にアウンサンスーチーの似顔絵と Free Aung San Suu Kyi! のスロ

ーガンが赤く染め抜かれた揃いのTシャツを着ていたのも印象的だった。このTシャツだけで捕まる理由になる。勇気ある人たちだなあとシュエバはおもった。そんな人たちを前にミンコウナインは次のように話を締めくくった。

「ドー・アウンサンスーチーと政治囚のみなさんにまでこの声が届きますように。私たちのおもいが届きますように。国民のために、一身を捧げ、苦難に耐えながら政治活動をつづけ、その信念のゆえに牢獄で、あるいは自宅で、不法にも拘束されている勇気ある人々に対して、私たちは深く頭を垂れるものです。あなたがたを賞賛し、敬意を捧げます。誇りにおもいます。あなたがたの献身と自己犠牲に見習い、範とします。あなたがたの行動に報いることができるよう私たちも活動をつづけます。その準備はできています。

崇高なるたたかひの戦士のみなさん、私たちの国は民主主義を獲得し、人権を確立してはじめて、国際社会のなかで、民族として、国家として名誉ある地位を占めることができますのです。民主主義を樹立するまで、私たちはおそれず、ひるまず、手を取り合って勇気を持ってたたかひます。みなさんのことを心に刻み、たたかって行く覚悟です。私たちは、拘束されている仲間であり、戦士であるみなさんに対して、このシュエダゴンパゴダの足下において固く誓います。固く、固くお誓い申し上げます」

この一部始終を収録したDVD映像をシュエバが見たのは6月17日のことだった。都内大塚で開かれたアウンサンスーチーの62歳の誕生日（実際の誕生日は6月19日）を祝う集会で舞台に設置された大きなスクリーンに映しだされた。彼が登場すると「おい、ミンコウナインだぜ！」とささやく声がまわりから聞こえてきた。ミンコウナインの口跡ははっきりしていた。みんなに元気を与える演説だった。NLD本部で聴いていた人たちはもちろん在日ビルマ人たちも聞きほられていた。目を輝かせ、身を乗り出し、スクリーンにひきつけられていた。シュエバもうっとりとしたと見とれた。日本人にも紹介したいとおもいからシュエバはこのDVD映像を入手したポンミントウンと連絡をとり、演説とナレーションを日本語に翻訳して画面に字幕をつけた。できあがった20分程度のビデオは7月21日に開かれたビルマ市民フォーラムの総会で披露した。日本人の出席者のあいだからこんな感想がきこえてきた。

「あんなに厳しい軍事政権の下でもビルマの人々はがんばっているんだ」

「ミンコウナインって名前はきいていたけど、こういう人だったんだね」

「鎮圧」はされたが

そして2007年8月、燃料費値上げに抗議するデモの口火を切ったミンコウナインはほかの活動家たちとともに8月21日にまた拘束された。学生指導者たちが拘束された後に僧侶たちが立ち上がった。1988年の民主化闘争時には学生と公務員が抗議行動の主役だった。しかし現在は、学生は郊外へのキャンパス分散、公務員はネーピードーへの首都移転のため、ヤンゴンでは組織的な行動が難しくなっていた。そこで僧侶の出番である。

民衆の喜捨・寄進によって生活をしている僧侶たちは民衆の苦しみを見るに見かねて抗議デモに立ち上がった。9月22日、僧侶の隊列はヤンゴン市ユニバーシティーアベニューのアウンサンスーチー宅前を通過した。なんとアウンサンスーチーが門まで姿を現し、僧侶たちに合掌して礼拝した。その様子を誰かが携帯電話で撮影した写真はロイターを通じて配信され世界を駆けめぐった。

僧侶たちはアウンサンスーチーが指導する民主化運動に力を貸してくれている、そんなおもしろい一般市民も加わるようになった。その日以降、ヤンゴンでは1988年の民衆決起を髣髴とさせるような僧侶をふくめた数万人もの大規模なデモ行進が連日行われた。民衆はこの動きが国際社会にまで届き、政治囚の解放、民主化の実現につながることを期待していた。それは単に燃料費値上げへの抗議にとどまらず、国民の希望を無視し、自由を奪い、基本的人権をも蹂躪している軍事政権への激しい怒りがこもった行動でもあった。しかし高揚は長くは続かなかった。9月27日、軍治安部隊はデモ隊に向けて発砲を開始した。多くの犠牲者が出た。僧侶が殺された。日本人ジャーナリスト長井健司さんも犠牲になった。容赦ない武力行使によってデモは鎮圧された。

民衆のなかの仏教

2007年12月12日夕方、ビルマ僧の講演会の通訳を頼まれたシュエバは築地本願寺へ来ていた。仏教関係者を中心にした集まりである。お話をなさるご僧侶はウー・ピンニャーウンタ（パリー語ではパニャーバンサ）といい、今回のビルマにおける僧侶弾圧によって生じた宗教的な危機を救おうと海外に出ているビルマ僧たちが結成した国際ビルマ仏教僧協会の責任者である。たまたまこの日、シュエバは東京地裁で法廷通訳の仕事もあった。在留特別許可を求めるビルマ人原告の本人尋問の通訳である。そのあと傍聴に来ていたカレン民族の友人トーマス・ゴンアウンと生ビールを飲んだ。2時間もの通訳でのどが渇いていたし、1989年ごろからの知り合いであるトーマスと久しぶりに話をしたかったからである。

難民認定や在留特別許可をめぐるビルマ人社会の動揺、11月に起こったビルマ人同士の殺人事件、ビルマ人による「地下銀行」摘発など話は尽きなかった。1時間ちょっとで3杯ずつジョッキを飲み干した。まだビールに未練はあったが講演会の始まる時間が迫っていた。トーマスと別れて築地へ駆けつけた。「酒のにおいがするかもしれません。どうぞお許してください」とシュエバはウー・ピンニャーウンタに謝った。「ヤ・バーデー（だいじょうぶだよ）、コウ・シュエバ」。お坊さんは笑みを浮かべ、隣に座ったシュエバの手をとんとんと叩いて許してくれた。

ご僧侶とは前日11日にも出会っている。ミャンマーの民主化を促進する国会議員連盟などの主催でピンニャーウンタ師らの講演会が参議院議員会館で開かれ、このときもシュエバが通訳をつとめた。師は80歳の高齢である。母国ビルマをあとにしたのは1959年のこと。半世紀にわたる外国生活のなかで、シンガポール、マレーシアのペナンなどに十を越える上座部仏教の寺院をひらき、それぞれの土地に住むビルマ人たちの心の支えでありつづけた。アメリカやヨーロッパに国々へもよく出かけている。国際的に著名なビルマ僧である。11日のこと、シュエバは緊張して堅苦しく初対面の挨拶をした。ご僧侶は開口一番、「やあ、コウ・シュエバ。BBCとかでよく声は聴いていたからはじめて会うよう気がしないなあ」と親しく声をかけてくださり、シュエバは

感激した。

築地本願寺での講演ではピニャーウンタ師は「9月事件」という表現でビルマ情勢とくに仏教界と庶民のかかわりを説明された。僧侶が立ち上がったのはあまりにもひどい軍事政権のやり方に抗議するものであり、政治的な意図を持ったものではないこと。にもかかわらず軍事政権は多くの僧侶に迫害を加えた。射殺された僧侶もいる。襲われた僧院もある。陸路国境を越えようと逃げ出した僧侶も多い。弾圧はいまもつづいている。上座部仏教の伝統を守り、民衆にとっての心の支えである僧侶の数は減り、僧院も荒廃した。仏教界の危機であり、それはまたビルマ社会の危機でもあると力説された。そして自分たち海外に居る僧侶としては国内からの要請に応えてできるだけ支援をしようとしている。国際社会への働きかけにも力を注いでいる。仏教徒の多い日本の人たちにも支援を願いたいというのが話の主旨であった。

わかりやすい話だった。日本人の参加者もうなずきながら聴いていた。シュエバは通訳しながらミンコウナインの手紙を翻訳したときのことが頭に浮かんだ。日本で難民認定を申請しているビルマ人の一人が自分の政治活動を示す資料のひとつとして法務省入国管理局に提出しようというものだった。当時、ラカイン州のシットウエ刑務所に収監されていたミンコウナインがヤンゴンに住む両親宛てた手紙である。おそらく厳重な検閲を意識してのことだろう。政治的なことは一切書かれていなかった。自分は元気です。獄中でひたすら仏教書を読んでいます。前に送ってもらった仏教関連の本は読み終わったので、今度は別の仏教書を送ってほしい・・・といった内容だった。手紙を翻訳していて、シュエバはかつて1995年にアウンサンスーチーが6年におよんだ一回目の自宅軟禁から解放されたときのインタビューを思い出した。彼女は一人であるあいだにこれまでなかなか読めなかった仏教思想にかかわる本を熟読していたと話していた。

当たり前のことだがたとえ民主化運動指導者であってもビルマ民族であればほとんどが上座部仏教徒である。彼ら、彼女らの思想と行動の基盤には仏教がある。その仏教は世俗の信徒（男はダガー。女はダガーマ）と聖職者（僧侶。タンガードー）との持ちつ持たれつの関係によって支えられている。そうした国民と僧侶の信頼関係を軍事政権が力を用いて断絶しようとした、それが今回の「9月事件」であると多くの人たちが考えている。武力鎮圧によって僧侶と民衆の抗議行動は終焉したかに見える。しかし軍事政権への不信はむしろ強まった。民衆は尊いタンガードーへの弾圧を許すわけではない。

「いつか来た道」を許すな

2007年9月、抗議行動のさなかビルマ政府は1993年から断続的に開催していた新憲法の骨格について討議する国民会議が終了したと発表した。そして最高裁長官を委員長とし、閣僚や専門家ら54人で構成される新憲法起草委員会を立ち上げた。来年には草案を書き上げ、国民投票にかけるのではとの観測も出ている。国民投票は、ビルマ政府が2003年8月に発表した「7段階民主化ロードマップ」の第4段階となる。そのあと採択された憲法にもとづいて総選挙を実施（第5段階）、議会招集（第6段階）、新政府の成立（第7段階）と進むことになる。これが国際社会に向かって軍事政権がいう「民主化」への道筋である。

その新憲法の骨子とは？ 一言で言えば、国軍こそがビルマの主人公であることを承認する憲

法である。例えば、国家に緊急の事態が発生すれば国軍が全権力を掌握するといった、いわばクーデターを公然と認めるような条文が入る。二院制の議会（ひとつは民族代表議院）が設置されるが、両院の議員定数のうち 25%は選挙によらず軍が推薦する議員が占める。大統領、副大統領は軍務経験者とする。外国の影響を受けたもの（たとえばアウンサンスーチーのように外国人と結婚した人物）は議員になる資格はない・・・。

国民民主連盟（NLD）はこうした新憲法の骨格に関する国民会議への出席を 1995 年以来拒否している。それでも軍事政権は新憲法草案を策定し、国民投票にかけるだろう。御用団体 USDA のメンバーが 2000 万人を越える現状からすれば新憲法は国民投票で承認されるだろう。そのあとどうなるか？ 多くのビルマ人は 1974 年憲法制定後に起こったことを思い出す。1962 年にクーデターによって国権を掌握したネウイン大將は 74 年憲法制定とともに革命評議会議長（元首）から新しく発足したビルマ連邦社会主義共和国大統領となった。名前の前につく冠称はボジョウ（大將）からウー（男子一般人の敬称）に変わった。ネウインは軍を退役して「一般人」になったのである。革命評議会を構成していた多くの軍人がネウインを見習った。政府はウーを名乗る「民間人」によって構成されることになった。政府は国内外に向けて「民政移管」は無事に完了したと発表したのである。今回もまた同じやり方で軍人たちの手によって「民主的な政府」が作られるのではと多くの国民が危惧している。

一瀉千里、「民主化」を強行しようとする軍事政権に対して民主化勢力は有効な対抗手段を持っているだろうか？ 国内の中心勢力である NLD はアウンサンスーチー書記長やティンウー副議長が自宅軟禁であるほか、投獄されている活動家も多く動きのとれない状況である。国民の多くもまた生きてゆくために USDA に入り「われわれは新憲法草案を支持するぞ！」と叫ばざるを得ない。88 世代学生グループは？ ミンコウナインや主だった活動家は 2007 年 8 月のデモを煽動したとして捕らえられ拘束されている。

2007 年 8 月、9 月の抗議行動を通して、軍人の横暴は許さない、いつの日か「軍人に勝つのだ」という気持ちは国民のあいだにさらに広がった。一人のミンコウナインは刑務所に入れられている。しかし無数のミンコウナインたちがビルマにはいる、シュエバは日本からエールを送る。がんばれ！ ミンコウナイン。負けるな！ 無数のミンコウナインたち。

（おわり）